

令和6年1月 9日

南の風 498

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

新しい年を迎え、初めての通常号です。皆様今年もよろしくお願いいたします。497号の続きです。

例えば「パスを5回してからシュートする」というオフンスルールを破り、3回パスをまわしたところでシュートをした場合です。ルール違反ですが、「そのタイミングでノーマークになったから」だとすればどうでしょう？ 目的はシュートを決めることです。ならばチャンス逃さず判断したのはむしろ正しいのではないのでしょうか。

この例に限らず、ルールの目的や背景を理解していれば、ルールを破ることができます。むしろ子どもたちが自分で考えてルールを破ったときこそ指導のチャンスです。ルールを破った理由を聞くことによって、さらに理解が深まるかもしれません。日本の子どもたちは言われたことをしっかり守る、人の期待通りの行動を取ることが得意です。しかし、人と違う行動を取ること、自分で自分の考えを持って行動することを苦手としています。

スポーツを通じて、子どもたちの成長に貢献するのであれば、彼らが苦手とする部分、「敢えてルールを破らせる」というのも一つの教育です。学校や社会ではなかなか手に入らない機会をスポーツで提供するのは、たまたま、こういった側面を伝えたときに結果として規律の弱い組織になってしまっては元も子もありません。

チームの規律は高い次元のまま、目的を持ってルールから逸脱できる、そんな選手を育てていくことができたなら、スポーツが子どもたちに果たす教育的な貢献は、非常に価値があるものになると思うのです。

ここで今まで述べてきた5つ（「理念」「環境」「信頼」「責任」「規律」）の要素を整理します。

引力と斥力のバランスから見ます。「引力」とは、子どもたちを引きつける力、「斥力」とは、子どもたちの反発を招く力という意味です。5つの要素は「引力」が働くものと「斥力」が働くものに分けられます。

「理念」と「環境」は「引力」が働きます。理想のチーム像を語ったり、練習環境を整えたりすればチームとしての魅力が増し、厳しい練習に立ち向かう原動力となるからです。反対に「規律」や「責任」には「斥力」が働きます。ルールが必要なことは理解できても厳しいチームよりは、自由な方が楽だと思えるのが子どもです。また日常生活で依存状態から抜けることができていない子どもにとって「責任」は重荷と感ずるものなのです。そして中心に「信頼」があります。左右両方のバランスをとり、つなぎとめるのが「信頼」です。

左右のバランスがとれていなければなりません。引力が強すぎれば、楽しそうだけれど実際は、約束も守れず実力もないチームになってしまうかもしれません。逆に斥力ばかりが強ければ、厳しいばかりで活気のないチームになってしまうでしょう。斥力を強めたら、引力も強めるとチームのバランスがうまくとれます。引力と斥力のバランスがとれたまま大きくなれば、幅が広く強い土台となります。その上にはより大きなものを積み上げられるでしょう。 次号に続きます。